

IBMフォーラム2003

オンデマンドへの取り組みを多面的に紹介。

日本アイ・ピー・エムとアイ・ピー・エムビジネスコンサルティングサービスは、2003年2月26日(水)~28日(金)の3日間、ロイヤルパークホテル(東京・箱崎)およびIBM箱崎事業所にて「IBMフォーラム2003」を開催。今年のテーマは「オンデマンド時代の幕開け e-business on demand」と、本誌今号の特集内容そのものであり、「マネージメント最前線」(6~15ページ)に登場したe-ビジネス・オンデマンド・サービス事業部 事業部長 飯島 淳一やアイ・ピー・エム ビジネスコンサルティング サービス 技術理事 高安 啓至も、それぞれの立場からセッションを担当しました。

そこで今回の「VISION NOW」では、初日のセミナーから特に特集内容を補完すると思われるセッションを聴講し、その概要と会場の雰囲気をお伝えします。

IBMのe-ビジネスへの取り組みの集大成「e-ビジネス・オンデマンド」

IBMフォーラムは、IBMの最新の取り組みと目指すべき方向を広くお客様にご紹介するイベントとして、日本アイ・ピー・エムおよびIBMグループが毎年総力を挙げて開催しています。お客様に向けての総合的なメッセージ発信の場として、日本アイ・ピー・エムが最も大切にしているイベントの一つといえるでしょう。

IBMフォーラム2003は、2003年2月26日(水)~28日(金)の3日間、ロイヤルパークホテル(東京・箱崎)およびIBM箱崎事業所にて開催され、多くのお客様が来

場されました。

今年のテーマは「オンデマンド時代の幕開け e-business on demand」。IBMは、7年前に初めて「e-ビジネス」を世に打ち出して以来、お客様のe-ビジネスを支える先進テクノロジーの開発に絶え間なく取り組み、さまざまな側面からお客様をご支援させていただいてきています。e-ビジネス・オンデマンドは、e-ビジネスに対するIBMの研究と活動の成果ということもでき、IBMフォーラム2003は現時点におけるその集大成の発表の場となりました。

日本アイ・ピー・エム代表取締役社長 大歳 卓麻による基調講演「オンデマンド時代の幕開け e-business on demand」(26日) 慶應義塾 塾長 安西 祐一郎氏による特別講演「慶應義塾 21世紀グランドデザインと今後の展望」(27日) 日本放送協会 番組制作局 社会情報番組部 チーフプロデューサーによる特別講演「プロジェクトX ~ 挑戦者たち ~ チームとは何か、そしてリーダーの条件」(28日)をはじめ、3日間にわたって100を超えるセッションが用意され、お客様の興味・関心や業種に合わせて自由に聴講いただきました。

オンデマンドはIBMにとっても大きな挑戦

基調講演の会場となったロイヤルパークホテル・ロイヤルホールは開場と同時に多くのお客様が詰めかけ、1,000名を超える来場者の方々の静かな熱気に包まれました。そこに登壇した大歳は、今後の企業経営にとってオンデマンド時代への対応がいかに大切であるかを強く訴えました。講演のあらましは次の通りです。



基調講演会場全景

企業の経営環境は大きく変わりつつあり、非連続な変化が連続して起こる中で「変化の予測」は不可能となりつつあります。その結果、従来のような静的プロセス(メイク&セル)での対応は今後ますます困難となるため、動的プロセス(センス&レスポンド)による対応が求められます。

それを実現するのがオンデマンド・ビジネスであり、それは即応性(Responsive)、柔軟性(Variable)、集中化(Focused)、回復力(Resilient)の四つのキーワードに集約されます。日本アイ・ピー・エムのお客様の中には、既にオンデマンド・ビジネスに対応しつつある企業・組織がいらっしゃる。例えば、市民向けの電子申請情報提供サービスを提供している地方自治体や、Webサービスを使った輸出信用状発行業務の最適化を進めている銀行のお客様などです。日本アイ・ピー・エム自身も、オンデマンド・ビジネスを支える製品群やサービスを開発するだけでなく、PC製品事業部のグローバルSCMなどで実際にオンデマンド・ビジネスを推進しています。こうした事例に共通する取



大歳 卓麻

り組みが「可視化」であり、お客様/サプライヤー/社員との間による情報の可視化による情報共有が何よりも大切です。

企業経営におけ



る「オンデマンド・ビジネス」への対応と同時に、ITによる「オンデマンド・オペレーティング環境」への対応、すなわち取引先も含めたシステム全体の最適化も欠かせません。オンデマンド企業の実現には、「オンデマンド・ビジネス」と「オンデマンド・オペレーティング環境」の連携が不可欠なのです。オンデマンド・オペレーティング環境に求められる要件は、統合化(Integrated)・オープン(Open)・仮想化(Virtualized)・オートノミック (Auto-nomic)の四つであり、IBMは先進のテクノロジーを用いてそれぞれに対応しつつあります。

3日間にわたって100以上のセッションが開催され、即応性(Responsive)・柔軟性(Variable)・集中化(Focused)・回復力(Resilient)というオンデマンド・ビジネスの4要件と、統合化(Integrated)・オープン(Open)・仮想化(Virtualized)・オートノミック(Auto-nomic)というオンデマンド・オペレーティング環境の4要件に着目して聴講していただくと効果的です。なお、IBM箱崎事業所会場の「オンデマンド・ギャラリー」では、最新事例をオンデマンド・オペレーティング環境の4要件にフォーカスして、デモンストレーションや映像によりご紹介しています。こちらもぜひご覧ください。

オンデマンドはIBMにとっても大きな挑戦です。今後ともご注目ください。



オンデマンド・ギャラリー

オンデマンド・ビジネスに欠かせない人材戦略

基調講演に続く、11時からのセッションでは、さまざまな講演テーマの中からアイ・ビー・エム ビジネスコンサルティング サービス ヒューマン・キャピタル・ソリューション パートナー 金巻 龍一の「オンデマンド時代の人材戦略 ~ヒューマン・キャピタル・トランスフォーメーション~」を選択。「人材」という側面からオンデマンド・ビジネスをとらえることにしました。

セッションの概要は次の通りです。

ビジネスのグローバル化により商品や経営戦略のコモディティー化が進む中で、人材はコモディティー化しない最後の経営資源といわれています。オンデマンド



金巻 龍一

時代には、いかにして人材を育成・活用するかが企業経営を左右します。オンデマンド・ビジネスを考える上で欠かせない重要な要素といえるでしょう。

オンデマンド時代に対応するには、人材経営を人材戦略、人材開発、人事部門、ワーク・スタイルの四つの視点から変革することが重要です。アイ・ビー・エム ビジネスコンサルティング サービスでは、コンサルティング会社としての立場から自社そのものも経営改革を進め、既存の枠にとらわれない柔軟な組織体系と人材の育成・活用を進めると同時に、人事の可視化を行い、ダイナミック・ワークスタイルとも呼べる新しいワークスタイルを創造しています。その経験から言えるのは、人材戦略を変革するには、継続的に試行錯誤を行えるかがどうか大きなポイントになるということです。



オンデマンド・ビジネスを支えるIBMの製品群

昼食をはさんで、午後最初のセッションでは、日本アイ・ビー・エム 取締役 BP &システム・PC製品事業担当 橋本 孝之の「オンデマンド時代を支えるハードウェア ~テクノロジーが未来を拓く~」を聴講。オンデマンド・ビジネスを支えるハードウェアについて、サーバーを中心に理解を深めることにしました。

講演の内容は次のようなものでした。

企業がオンデマンド・ビジネスを実現するには即応性・柔軟性・集中化・回復力の4要素が必須であり、それを実現する技術のキーワードとして統合化・オープン・仮想化・オートノミックの四つを挙げることができます。具体的にはロジカル・パーティショニング(LPAR)によるサーバー統合やストレージ統合による統合化、Linuxによるオープンへの対応、グリッド・コンピューティングによる仮想化、さらにはオートノミック・コンピューティング機能の搭載といった先進テクノロジーによって対応します。

なお、セッションの最後にはオートノミック・コンピューティング技術をいち早く採用した最新モデルThinkPad® T40などについての紹介もありました。



橋本 孝之

米国におけるオートノミックの最新動向



続いて聴講したのが、米国IBM オートミミック・コンピューティング担当ディレクター デービッド・パートレットによる「オンデマンド・ビジネスを実現するオートミミック・コンピューティング」のセッションです。パートレットは、IBMにおけるオートミミック・コンピューティングの最高責任者であり、米国の最新情報の紹介が期待できることから選択しました。

英語によるセッションということで、内容をどこまで把握できるか不安でしたが、同時通訳が用意された上、スクリーン上に表示されるプレゼンテーション資料はすべて日本語ということもあり、心配は杞憂に終わりました。もっとも多くの聴講者の方々が英語にも堪能なようで、同時通訳用受信用のヘッドホンのアンテナを立てていた方はほとんど見掛けませんでした。

セッションでは、まずオートミミック・コンピューティングに対するIBMのビジョンが示されました。e-ビジネスの進展に伴い複雑化する一方のITシステムを効果的・効率的に運用して、生産性の向上、コスト削減、サービス品質の向上などを実現するのがオートミミック・コンピューティングです(10ページ参照)。オートミミック・コンピューティング技術の発展段階には、

基礎・管理・予測・適応・自律の五つのレベルがあり、お客様自身がそれぞれのレベルに応じて取り組めるように、お客様の取り組み状況をチェックす



デービッド・パートレット

るツールの実演が行われました。

最後に、現時点で提供されているIBM製品のオートミミック機能が紹介されました。「オートミミック実現へのロード・マップは既にできていて、多くのIBM製品で実際に使用可能になっている」ということが特に強調されました。

お客様が自ら語る先進事例

IBMフォーラムでは、日本アイ・ビー・エムのお客様による講演も多数用意されています。お客様がそれぞれ取り組まれている先進的な事例を、お客様自身に紹介していただくのです。

そこで初日最後のセッションとして選んだのが株式会社NTTデータ 技術開発本部バイオインフォマティクスグループ cell computing プロジェクトリーダー 鍾水 聡氏氏の「cell computing® ~グリッド・コンピューティングによる新たなビジネスへの挑戦~」です。

セル・コンピューティング・プロジェクトは本誌36号(18ページ)で紹介した事例でもあり、その後の展開を知りたかったことから聴講しました。

このセッションは、ロイヤルパークホテルではなくIBM箱崎事業所内に設けられた別会場で行われました。ただ両会場は東京シティエターミナルをはさんで徒歩3分という立地であり、移動には何の不都合もありません。今回の取材では1回のみ移動でしたが、セッション間に30分間の休息時間が設けられていることもあり、セッションごとに両会場を歩き来することも可能でした。

なお、鍾水氏の講演内容の詳細は次ページのコラムを参照してください。

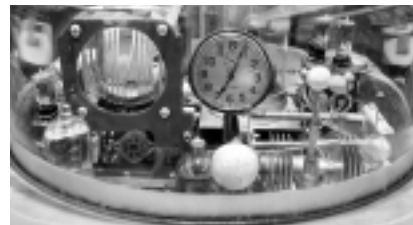
次世代ソリューションから
“未来”ソリューションまでを展示
前述したように、IBM箱崎事業所では

セミナーと並行して、「オンデマンド・ギャラリー」と題された展示があり、オンデマンド・オペレーティング環境の4要件に合わせて統合化(Integrated)・オープン(Open)・仮想化(Virtualized)・オートミミック(Autonomic)の四つのゾーンが設けられ、デモンストレーションや映像でIBMの最新テクノロジーが紹介されました。

中でも来場者の注目を集めたのがオートミミック・ゾーンでデモンストレーションが行われたHotRodです。この技術は米国IBMのワトソン研究所で開発され、サーバーの負荷の変化を事前予測して、自律的に負荷分散を制御します。基礎・管理・予測・適応・自律の五つのオートミミック・コンピューティング技術の発展段階でいえばレベル4に当たる「適応」を世界で初めて実現したものです。

こうした次世代ソリューションに加え、展示会場中央のGizmoコーナーには、将来を予測する双眼鏡「Magic Bino Culars」や、ハイゼンベルグの不確定性原理とビッグバン・ワームホールを応用した時間空間モジュール、すなわちタイムマシン「Business TimeMachine」など、テレビ・コマーシャルでおなじみの「未来”ソリューションのオブジェも展示され、来場者の微笑を誘っていました。

なお、IBMフォーラム2003のセッションで用いられた資料などが日本アイ・ビー・エムのWebサイト(<http://www-6.ibm.com/jp/event/forum2003/post/>)にて公開されています。興味のある方はぜひアクセスしてみてください。



Gizmoコーナーのオブジェ

セル・コンピューティングの大規模実証実験がスタート。 PCグリッドがよいよ現実のものに

IBMフォーラム2003では、日本アイ・ピー・エムのお客様による講演も多数用意され、先進的な取り組みをお客様自身にご紹介していただきました。本誌36号「お客様事例」で取り上げた株式会社NTTデータのセル・コンピューティング・プロジェクトについても、技術開発本部バイオフィオマテックスグループ cell computing プロジェクトリーダー 樋水 訟氏により「cell computing® ~ グリッド・コンピューティングによる新たなビジネスへの挑戦 ~ 」と題したセッションがあり、大規模実証実験の成果などが紹介され、PCグリッドの可能性が示されました。

二つの大規模実証実験プロジェクトがスタート

NTTデータ株式会社のセル・コンピューティング・プロジェクトとは、企業や家庭におけるPCの余剰CPUパワーを統合し、仮想的なスーパーコンピュータを実現しようというものです。同プロジェクトでは、2002年12月20日から3カ月間の予定で大規模実証実験をスタートさせ、以下の二つの研究プロジェクトに取り組みました。

●遺伝子病治療研究プロジェクト

BOLERO(図1)



図1. 遺伝子病治療研究プロジェクト向けアプリケーション

東亜合成株式会社による研究プロジェクトです。ヒトの遺伝子情報からの周期性を発見し、病因遺伝子との関係を解析することで、新薬の開発へつなぎます。

●光マイクロプロセッサ・プラットフォーム実現プロジェクトOPAL(図2)

NTT物性科学基礎研究所による研究プロジェクトです。光学的に新たな特徴を持つ材質を発見することで、光コンピューターのためのチップの設計を目指します。

実験には1万台以上のPCが参加し、コミュニティーWebサイトの掲示板などを通じて、プロジェクト全体の計算結果を知ることができるだけでなく、参加者同士で実験に関するさまざまなコミュニケーションを取ることができます。

事業化に向けて次のステップへ

こうした実験を通じて、セル・コンピューティングの事業化に必要なインフラストラクチャーやサービスの要件がより明確になった上に、イントラネット型・エクストラネット型・インターネット型の3タイプのサービス(本誌36号23ページ参照)に加え、“World”と名付けられた第4の可能性が見えてきました。これは、アプリケーションとセル・コンピューティングを連携させることにより新しいビジネスを創出しようとするものです。

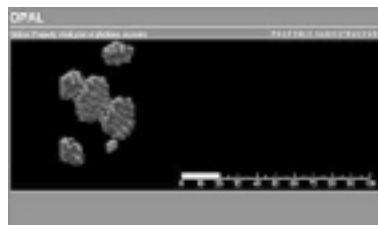


図2. 光マイクロプロセッサ・プラットフォーム実現プロジェクト向けアプリケーション

「大規模実証実験を通じて感じたのは、研究パートナーの企業の皆さんや、日本アイ・ピー・エムをはじめとする大規模実証実験パートナーの方々、もちろんPCの計算リソースを提供してくださる参加者の皆さん、こうした方々の協力によって初めて実現するプロジェクトだということです。

当初は「無償で一般ユーザー様のPCを利用して、NTTデータだけが儲けを得るようなことを考えているのではないか」という誤解も一部にあったようなので、研究パートナー・参加者・NTTデータの



講演中の樋水氏

三者がWIN-WINの関係を築ける取り組みであり、社会貢献にもつながる画期的なプロジェクトだということをご理解いただけるように、もっともっと告知していかなければならないと思っています。

実験が始まってからは問い合わせも急増し、事業化の手ごたえを感じています。その一方でセキュリティー面を心配される方も少なくはないので、安全性を認知してもらおうと同時に、多くの人の目に触れることを逆手にとって、映画やゲームなどエンターテインメント業界でユーザーを巻き込んだ広告への可能性を検討しています。いずれにせよ参加者あつてのプロジェクトですから、皆さんへより多くの利益を還元できるシステムに育てていきたいですね(樋水氏)

cell computingは、株式会社NTTデータの登録商標です。